



M・ウルストンクラフトの著作にみる一八世紀の女性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白井, 堯子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005007

M・ウルストンクラフトの著作にみる一八世紀の女性

白井堯子

一、はじめに

イギリスの女性メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759—97) は、一七九二年に『女性の権利の擁護——政治および道德問題の批判をこめて』⁽¹⁾ (*A Vindication of the Rights of Woman: with Strictures on Political and Moral Subjects*) という挑戦的なタイトルの本を出版し、これによって、今日、女性解放思想を歴史上最初に体系づけた思想家として不動の地位を獲得しています。彼女は、近代アナキズムをこれまた最初に体系づけたウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756—1836) と結ばれ、娘メアリの出産に際し、わずか三八歳の若さでこの世を去りました。ちなみに、この娘メアリは、のちにあの有名なイギリスのロマン派の詩人シェリの妻となり、『フランケンシュタイン』を書いています。

ウルストンクラフトは、一般には『女性の権利の擁護』の著者としてのみ知られていますが、彼女は短い人生の最後の十年間に、九冊の著書と三冊の翻訳書、そして急進的な出版社ジョンソン書店が出版した月刊雑誌 *The Analytical Review* に四二二の書評を残しています。⁽²⁾

ここでは、彼女の主著『女性の権利の擁護』と、彼女の遺稿集に入れられた小説『女性虐待』(The Wrongs of Woman, 1798)を取りあげて、ウルストンクラフトという一八世紀のユニークな女性が、その著作の中で一八世紀の女性をどのように捉えたか、何を問題提起したかを述べたいと思います。ウルストンクラフトの著作の特徴の一つは、彼女自身の実際の見聞や体験がその素材になっていることであり、今日、ここで取りあげる二つの著作に現れる女性たちも実際に彼女が出会った女性がモデルになっています。『女性の権利の擁護』では上流の女性が最も厳しく批判を浴びており、小説『女性虐待』では中間層と下層の女性が主人公として登場致しますので、一八世紀末のこの二つの階層の女性の実態を、ウルストンクラフトの目を通して垣間見ていきましょう。

二、時代背景と生涯

本論に入る前に、ウルストンクラフトがどのような時代に活躍したか、どのような生涯を送ったかを、ごく簡単に述べてみたいと思います。すなわち、彼女の思想の背景をお話し致しましょう。

彼女が活躍した一八世紀後半のヨーロッパは、イギリスの産業革命とフランスの政治革命が交錯する激動期の中にありました。産業革命は、小農民を駆逐し、機械を使う工場の出現によって熟練職人の意義を奪い、大量のプロレタリアート、特に女性と児童を労働市場に駆り出すなどして人びとの生活を根底から変えつつありました。フランスでは、一七八九年にフランス革命が起こり、ヨーロッパ最大の専制君主政体が倒され「人権宣言」が出されています。他方アメリカでは、すでに一七七六年にアメリカの独立が確立し「独立宣言」が出ているのです。

ドウヴァ海峡を隔てた対岸のフランス革命と大西洋を隔てたアメリカ革命は、勿論、イギリス社会にも直接大きな影響を与えました。イギリスでは特にフランス革命に対する共感と嫌悪が激しく火花を散らし、保守に対する革新、

歴史と伝統に対する理性・自由・平等の対立が交錯していきます。こういった歴史の転換期の中でウルストンクラフトは、フランス革命に強い関心を示し、またアメリカの独立やフランス革命をひき起こした啓蒙思想を深く呼吸し、人間の自由・権利・平等を真剣に考えるようになっていくのです。

ウルストンクラフトは、一七五九年にイギリスの没落した中産階級の家に生まれました。父親は農業に従事していましたが財産を失い、その挫折感と酒癖の悪さのために、家族に対してはしばしば暴力をふるう専制君主でありました。彼女は小さい時からこのような父親に反抗し、また同時に、何の抵抗も示さず夫の暴力に屈して長男だけを溺愛する母親の姿に不満を感じていました。更に長男のエドワードも、長男の特権をふりまわす男性であり、また妹のイライザは結婚して一児に恵まれましたが、これまた夫の獰猛な性格に苦しむのです。ウルストンクラフトは、こういった自分の家族の中の男性（父親、長男、妹の夫）の暴力や専制支配に怒りを感じ、また同時に家族の中の女性（母親、妹）の惨めさ、男性の言いなりにならない状態にも怒りといったたまたまなさを感ずりました。この自分の家族の中に見られる男性と女性の関係が、彼女の女性解放思想の下地になったと言われています。

彼女は初等教育を田舎の学校で数年間受けただけでしたが、近くの牧師や年上の親友から文学、絵画、音楽などを学んだり、仕事場で出会った啓蒙思想家から啓蒙思想を吸収するなどして勉強をしました。彼女はフランス語やドイツ語も学び、仏書や独書の英訳も出版しています。女性が学校教育を受けることなど考えられなかった当時の社会の中で、彼女は、周囲の人から貪欲に知識を吸収し、自分の頭脳を鍛え、男性顔負けの思想家に成長していきました。特に二五歳の時に、啓蒙思想家であり牧師でもあったリチャード・プライス (Richard Price) から既成秩序に対する批判を学んだことは見逃してはなりません。

また、経済的に困窮していた彼女は、一家を支えるために、妹や友人と学校経営を行ったり、上流階級の老女の有給の話し相手になったり、貴族の家庭に入って家庭教師になったりして生活の資を得ましたが、同時にこれらの仕事

は、彼女に色々な社会を観察して視野を拓げる機会を与えました。

しかし、ウルストンクラフトが著述によって歴史に名を残すことができたのは、何ととっても、一九世紀には「書籍業の父」と呼ばれたロンドンの急進的な出版社主ジョウジフ・ジョンソン (Joseph Johnson) と出会い、彼から特別の父親のような暖かい愛情を受けたためでしょう。ジョンソンは、彼女に収入を得る手段として出版にかかわる仕事、翻訳の仕事を与え、また文筆を職業とするように励まし、ジョンソン書店が発行する急進的な月刊雑誌 *The Analytical Review* に書評を書かせました。そして、彼女の全著作を出版し、彼女の死まで彼女を支え続けたのです。

更に、彼女に既成倫理や社会秩序に対する批判を学ばせ、フランス革命前後の啓蒙思想を深く呼吸する機会を与えたのも、このジョンソン書店を中心につくられたサークルであった、と言わねばなりません。彼女は、この書店に入りしていたロマン派の詩人ウィリアム・ブレイク (William Blake)、⁽¹⁾ 酸素の発見者の一人ジョウジフ・プリーストリ (Joseph Priestley)、⁽²⁾ アメリカの独立に影響を与えた急進主義者トマス・ペイン (Thomas Paine)、⁽³⁾ 画家で彼女が恋をした相手ヘンリ・フュースリ (Henry Fuseli) と交わり、彼らと意見を闘わせて知的な雰囲気を楽しみました。彼女は、「私は、一人でいることが嫌になった時はいつでも、ジョンソン氏の所に行きます。そこには、私が本当に喜びを感じられる仲間がいるからです。」⁽³⁾ と妹に書いています。

ウルストンクラフトの生涯を語る時、一番基礎資料となるのは、彼女の夫となったゴドウィンの書いた伝記『⁽⁴⁾ 思ひ出』 (*Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman*, 1798) です。この伝記の中でゴドウィンは次のように述べています。「彼女は、女性は無かであるという仮定の上に作られているしきたりを生涯を通じて無視したのであるし、自分の行動を導く精神の清らかさと、そしてその性格を弁護する自分の見解の完全さを信じていた。⁽⁵⁾」このゴドウィンの言葉が語っているように、彼女の生き方には、根深い因襲に満ち満ちた一八世紀の女性の

ものとは思えない、いや、今日でも目を見張るものがあります。それを示す一例として彼女の男性関係が挙げられるでしょう。

彼女は、スイス人で「夢魔」という絵を描いた人として著名なフェースリに熱烈な愛情を抱き、遂に、「フェースリ夫人の所へ行き、夫人に彼女の家庭に入って一緒に住みたいと言いました。そして次のように付け加えました。この申し出は、貴女の夫に対する私の心からの愛情から出ています。……」この率直な告白に目を丸くしたフェースリ夫人は、彼女の懇願を拒絶したばかりでなく、直ちに、家に来てはならないと言ったのです。⁽⁶⁾この引用の内容がどこまで正しいかは、よくわかりませんが、彼女は傷ついた心をいやすべく新しい環境を求めて革命渦まくフランスへ渡り、そこで、アメリカ人ギルバート・イムレイ (Gilbert Inlay) と結婚をし、女の子を出産します。イムレイはアメリカの独立戦争やフランス革命で活躍し、奴隷問題などに大変自由な考えを持っていた人であったことを考える時、ウルストンクラフトが彼に心ひかれたのは一応うなづけますが、この幸福は束の間のものでありました。イムレイは商業投機と他の女性に走り、彼女は、このショックのために、何と二度も自殺未遂をはかっています。このように恋愛においても結婚生活においても挫折と苦悩を味わった彼女は、その後、アナキスト、ゴドウィンと結ばれるのですが、これも最初は法律を無視して結婚式は行わず、しかも別居結婚という形態をとりました。

ウルストンクラフトのこのような男性関係は、彼女に道徳的に退廃した女性という烙印を与え、*The Anti-Jacobin Review* は「売春」という索引項目のところにウルストンクラフトの項を見よ、とまで書いています。⁽⁷⁾彼女の生き方に対するこうした評価は、彼女の著作にも一世紀以上にわたって暗い影を落としてきました。しかし、二〇世紀に入ってからは、その生き方は少しずつ見直され、自己の愛情に忠実に、主体的に生きた女性、と讚美の言葉が与えられるようになりました。ウルストンクラフトの生き方は、一八世紀という時代の枠をはるかに越えたものといえると思いますが、詳しくは、ゴドウィンの『思い出』の拙訳をお読み頂ければと思います。⁽⁸⁾

三、『女性の権利の擁護』について

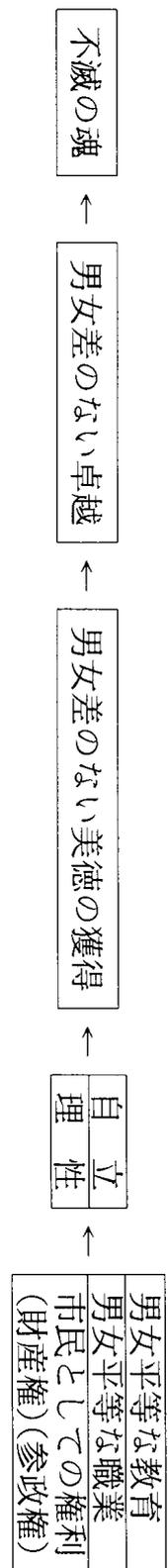
では、ウルストンクラフトが、その主著『女性の権利の擁護』の中で、一八世紀の女性、特に上流の女性をどのように捉え、何を問題提起したかを述べる前に、『女性の権利の擁護』の内容を簡単に紹介したいと思います。

この書は四五二頁にわたる大著で、一七九二年、彼女が三二歳の時に出版されました。

これは、フランスの外交家として著名なタレイラン^{II}ペリゴールに献呈されています。それは、タレイランが一七九一年フランスの立憲議会で公教育について朗読した、いわゆる「タレイラン報告」をウルストンクラフトが読んだことに始まります。

この「タレイラン報告」は、女性が法律上男性と差別されることは、抽象的な原理に従えば、説明不可能な政治現象だが、女性を政治から排除することは男女双方にとって幸福だ、と述べています。そこでウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』の中でタレイランに問いかけます。「人類の半分である女性が男性によって政治に参加することからすべて排除されているのは、抽象的な原理に従えば、説明不可能な政治現象である」とあなたが認める時、あなたの前には真理が一瞬その道を開いたように思えます。もしこの女性の排除が説明不可能ならば、女性の政治参加を認めていないあなたがたフランスの憲法の根拠は何でしょうか。もし抽象的な人権が議論の対象にされ、論理的に説明されうるものならば、女性の権利も同じように議論の対象にされ、論理的に説明されるべきです⁽⁹⁾。そして彼女は、フランスで女性の権利についての研究が始まり自分の主張を確認してほしいと願うのであります。

しかし、彼女は、女性が参政権や財産権などを獲得して市民として自立するように、と主張しているだけではありません。ここに、啓蒙思想とキリスト教に基づいた彼女の主張を図に書いて説明してみましょう。



女性も男性と同じように、死後にあの世で不滅の魂を持ちうるのであるから、その不滅の魂を獲得するために、この世で努力しなければいけないことは、美德を身につけて卓越することである。美德を身につけるとは、別の言葉でいうと、できるだけ完成の域に近づくことである。ただし、この美德には、男性は強く、女性は優しくとか、男性は外で大きな仕事をし、女性は細かな世話をするとかいうような性差があってはならない。男女の美德は、それぞれその性質を異にすべきでなく、ただ一つの永遠の基準を持つだけだ。美德は相対的な概念ではない。神の摂理によって定められた美德への道は、ただ一つである。すなわち、男女共、同じ手段によって美德を身につけねばならない。その手段とは、「自立していること」と「理性を磨くこと」である。であるから、女性が経済的に自立するために、女性にはあらゆる職業の門戸が開かれねばならないし、市民として自立するために、参政権や財産権が与えられねばならぬ。経済的に、また市民として自立してこそ、女性は初めて精神的に自立できるのだ。また、女性が可能な限り理性を磨くために、女性にも男性と同じように高等教育が与えられねばならない⁽¹⁰⁾。

非常に簡単に述べましたが、ウルストンクラフトは、このように、女性の経済的・精神的自立、政治的な権利の主張、高等教育の問題など、現在、女性の問題を考える時に取り上げる事柄の殆どすべてを、この本の中に列挙し、論理化しています。その意味で、『女性の権利の擁護』は、女性解放思想を最初に体系的に樹立した書物と言われるのです。

またウルストンクラフトは、この書の中で、ルソー(J.J.Rousseau)や、当時の女子教育書の著者、グレゴリイ

(John Gregory) やフォーダイス (James Fordyce) などの男性は勿論のこと、バーボールド (A.L. Barbauld) やピオッツィ夫人 (Hester L. Piozzi) などのブルーストッキングの女性たちですら、女性を人間としてよりも女として考えており、彼ら(彼女ら)は、男性に都合のよい女らしさを強調し、女性の美徳の基礎を考へる時に来世のこと(不滅の魂を獲得すること)を考慮に入れず、専ら現世に役立つことだけを考へている、と批判しています。そして、今や、女性は地上を美しく飾るだけの花であることをやめて失った尊厳を取り戻す時だ、と主張し、女性を人間として自立させ、限りなく理性を磨かせる女子教育の重要性を説きます。

四、上流階級の女性について

彼女は、現実の一八世紀の女性が、その受ける教育と社会における従属的な地位のゆえに墮落してしまつて、およそ彼女の考へる、自立と理性に支えられた美徳とは縁のない嘆かわしい状態にすることを指摘します。そして、特に、上流階級の女性に最も厳しい批判を浴びせていますので、それを、ここに取り出してみましよう。

その前に、『女性の権利の擁護』の中に記されている上流の女性は、実は、彼女が二七歳から二八歳にかけてアイランドの貴族キングズバラ家で家庭教師として一〇カ月間働いた時に接した人たちがモデルになっているといふことを申し上げたいと思います。それは、キングズバラ家に滞在中に妹に送つた手紙の中に描かれている貴族の女性の姿が、そっくりそのままこの本の中に再現されているからです。

ここで彼女が妹に送つた手紙を読みます。「私は、キングズバラ家の大きな門を、バステューユに入るような気持ちでくぐりました。ここには、私の血が凍りついてしまうような勿体ぶつた愚かさがあります。貴族の女性たちの生活がどんなに浪費的なものであるか、あなたには想像もできないでしょう。一日に五時間もの時間を化粧に費やし

ているのです。私は、貴族の女性に生まれるほど不幸でなかったことを神に感謝しています。ここでは愚かな女性たちに囲まれているので、ちっとも社会的な話ができません。彼女たちの話といたら、ドレスのことと結婚生活のことなのです。キングズバラ夫人の情熱は、ドレスに注がれていない時には、何時間も何時間も何匹もの犬に向けられています。自分の子供をすっぱらかして、本当の意味での優しさを備えていない女性が、"ワンワンちゃん"などと子供っぽい言葉を発しながら犬を愛撫するのを見るのは、滑けいとしか言えません。⁽¹¹⁾

次にウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』の中で述べている上流階級の女性批判を、できるだけウルストンクラフトの言葉をそのまま使って、私が主題別にまとめたものを発表したいと思います。

化粧や衣装について 上流階級の女性たちは、小さい時から美について、デリカスイについて誤った概念を教え込まれているので、行動の動機が混乱させられている。彼女たちは、「美しければ、少なくとも20年間、男性によりかかって暮せるのだから、その美しさ以外のものは何も必要ないのだよ」⁽¹²⁾とか、「美人ならば、どんな種類の男性でも、欲望の対象としては、その女性に女性としての価値を認めるものだよ」⁽¹³⁾と耳にたこができるほど聞かされる。また、食欲のないことがデリカスイの証明であると思ひ込み、それを誇りにしている人が多い。確かに、そういったデリカスイや美しさは、男性の心をひくし、男性の情欲は美しき女性を王座の上に祭り上げるのだから、彼女たちは束の間ではあるが、専制支配をふるうことができる。また衣装や化粧を愛することは、男性における誤った野心と同じく、権力を愛することから生じるのであるから、次のようなことが言えないだろうか。すなわち、女性が鏡の前に何時間も座るのは、本来ならば男性と共有すべきものなのに、不当にも奪われてしまったあの合法的な権利の一部を間接的に取り戻すための自然の姿なのだ。

しかし、女性が優美さや、デリカスイと名付けられたあの弱さを大事にしたり好んだりしている時には、彼女たちは、広い意味での彼女たちの真の利益とは相反する行動をしているのだ。デリカスイについての誤った考えは、女性

の体から生気を奪い体を病的にする。また体のことばかりを気にさせることによって精神をイシクさせる。彼女たちは鳥のように鳥かごの中にとじ込められているので、自分を装うこと以外にすることがない。そして女王様気取りで、止まり木から止まり木へ勿体ぶって歩く。人間の性格は、何に頭を使うかによって形成されるのだから、真剣な仕事に従事せずお化粧ばかりに夢中になっている彼女たちは、愚かになるし、公共心は虚栄心によって駆逐されるのだ。彼女たちが装いをこらす衣装も自分で紡いだり、こしらえたりしたものではない。健康や美德は、そうした労働から得られるのだが。確かに上流階級の女性の愚かさは、美に対する官能的な敬意から生まれているのだ。このような女性が不滅の魂を持ちうるだろうか？

育児について 上流階級の母親は、自分の子供の世話を他人に任せっきりにしている。自分が可愛がっている犬は、いつもベッドにまで連れ込むし、その犬が病気にでもなるうものなら大騒ぎをして看病に勤しむのに、わが子が育児室で愚かな乳母にどんなに歪められているかについては全く無頓着である。

また、上流階級の母親の多くは、感情の奴隷であるから、例えば、髪の色がお気に入りスタイルにならないとか、夫には言えないほどのお金をトランプ遊びですってしまったりとかいうようなことで子供に当り散らし、子供の精神を平気で傷つける。そうかと思うと、彼女たちは愛する子供たちの現在の利益よりも将来の利益を選び取る次元の高い崇高な愛情に欠けているので、子供を甘やかす。また彼女たちの召使に対するマナーも愚かなものであって、子供に、召使というものは彼らにかしづく人と思わせてしまう。

しかし、上流階級の母親は、このように自然が与えた母親の義務を果していないにもかかわらず、どの階級よりも、子供に親への尊敬を強要するのだ。

今ここに述べたことは、すべて、彼女たちが知性に欠けていることから、また何よりも精神の独立に欠けていることから起こる。夫にすべてを頼るようにと教えられた従順な妻というものは、大抵愚かな母親なのだ。彼女たちを良

き母親にするには、彼女たちを人類固有の諸権利に参加させることによって、あらゆる束縛から解放し、合理的な人間、自由な市民にしてやること以外に道はないのだ。

ペットについて 上流階級の女性は自分の子供は抱かなくとも、愛玩用の犬は胸に抱きしめる。また、毘にかかつて死にそうになっている鳥には涙を流したりするけれども、彼女たちは本当の意味で慈愛心にあふれているわけではない。なぜかという、肌をつきさすような寒い日にも、雨が激しく降る時にも、自分の車の御者と馬を何時間でも平気で外に待たせておくのだから。彼女たちが理性を磨き分別と知性を備えていれば、夫から飼犬にいたるまでの家族全体をその重要性に応じて愛するようになるであろう。また同胞の安楽よりも動物の安楽に気をとられてしまつて、召使を侮辱するなどということもしないであろう。

世間の評判について 一般に上流階級の女性には、不義密通はつきものなのに、彼女たちは、世間の評判、特に貞節だという評判が女性には欠かせないものだと思っている。ルソーは『エミール』の中で、「評判は男性にとっては美德を葬る墓場になるが、女性にとっては、美德の栄光の座になる⁽¹⁴⁾」と書いている。世間の評判に左右されるような美德は、世俗的なものには過ぎず、理性とは縁のない人の美德だ、と判断するのは、実に論理的ではないだろうか？

知性について 上流階級の女性とはどんな人？ と聞けば快樂と権力を好み、放蕩者と軍人が大好きで子供のように玩具に愛着を持ち、虚栄心のあまり美德よりもたしなみごとを大事にする人、という答えがかえってくるだろう。これはすべて彼女たちの知性が欠如していることを示すわけだが、彼女たちのその愚かさを示すもう一つの例を挙げよう。

それは彼女たちが、しきりに未来をのぞきたがつて恥かしげもなく美男子の占師の家に馬車を走らせ、吸血鬼の餌食になっていることだ。この行為ほどに神の英知に対する侮辱があるうか。ものごとはすべて、勿論、それほど歴然としていないものをも含めてものごとはずべて、神が御自分の計画を成就するために想像されたのだ。至高の英知を

持つ神がまだお示しになっていないものを知りたがるとは、いかに理性に反し、いかに不敬なことか。彼女たちが努力して知らねばならぬことは、自分の義務の認識なのだ。

まだ幾つかの主題を挙げることができませんが、時間の制約がありますので、ここでウルストンクラフトの上流階級の女性批判を、やはり、できるだけ彼女の記した言葉を使って簡単にまとめてみたいと思います。

この世の害悪と悪徳は、大部分、財産に対する尊敬から生まれている。上流階級の男性は、本来なら才能と美徳と義務の遂行によって得るべき尊敬を、富める人間だ、ということだけで獲得する。同様に、富と家柄は、価値がゼロの女性にも七光を与えてきた。しかし、そういうものによって墮落し身動きできなくなるのは男性よりも女性の方が甚だしい。というのは、男性は紳士という特性を支えるために多少の学問を身につけねばならないし、軍人や政治家になることによって自分の能力を伸ばすことができるのだから。しかし上流階級の女性の仕事は、快楽を追うことであり、そのために、自然の秩序は転倒させられる。自然の秩序は、額に汗することを真の喜びとしてきたのだ。また彼女たちは、美という支配権力に磨きをかけ、その権力を維持するために自然権を放棄してきた。であるから、上流階級の女性は、美徳の基礎そのものを危うくし、社会全体に腐敗を拡げる存在であり、最も憐れまれるべき人たちの⁽¹⁵⁾のだ。

このようにウルストンクラフトは上流階級の女性を批判し、また、彼女は、中産階級の女性が最も自然な状態の中にいると考えられるので彼女たちに特別の注意を払いたい、と述べています。そして啓蒙思想の原理のみが人類の運命を変えることができるのだ、と断言し、社会に、もっと平等が確立すれば、また階級制度がなくなれば、そして女性が解放されれば、そこに初めて、個人の美徳が育まれるであろう、と言うのです。そして、公的な美徳は個人の美徳の総計以外の何ものでもないのだから、そのような変革がなされれば、社会全体が有徳になり、幸福で自由なものになるであろう、と主張します。

最後に、ウルストンクラフトが何故このように上流階級の女性を特にとり上げ、彼女たちに最も厳しい批判を浴びせたかという問題に触れたいと思います。それは、一つは、上流階級の女性の悪影響の大きさを考えたからでしょう。彼女は、『女性の権利の擁護』の中で、「女性は揃いも揃って貴婦人になりたがる」と一般の女性たちが上流階級の女性に憧れる実態を書いています。それゆえに、上流階級の女性が、いかに「美德の基礎を危うくし、社会全体に腐敗を拡げる存在であり、最も憐れまれるべき人たち」であるかを強調する必要があったのでしょう。

もう一つ申し上げねばならないことは、ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』を書いた時、彼女の頭の中にはバーク (Edmund Burke) の貴族女性讚美に対する批判があったということです。バークは、その著『フランス革命の省察』(Reflections on the Revolution in France, 1790) の中で、人間の感情、情念、本能、欲望、偏見を重視して、理性や人権というような抽象的な議論を拒否し、幾世代にもわたる経験、慣習こそが慣行に基づく権利として尊重されるべきだ、と考えました。そして、女性に関しては、『崇高と美の観念の起源に関する哲学的研究』(A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful, 1757) の中で理想の女性像を上流階級の女性の中に見、生産から切り離され、夫に依存して社交に彩りを与える役目を果たす女性、私有財産を受け継ぐべき相続人を生む女性、男性に快楽を与える優美さ、繊細さを持つ女性を讚美しています。そして、『フランス革命……』の中でも、マリ・アントワネットの美しさを称え、彼女の持つ all the pleasing illusions が理性の強調によって消えることを恐れます。ウルストンクラフトは、『女性の権利の擁護』出版の二年前に『人間の権利の擁護』(A Vindication of the Rights of Men, 1790) を書き、こういったバークの考えに攻撃の矢を向けました。われわれは、『女性の権利の擁護』を読む時、これに先立って書かれた、バークの上流階級讚美に対する彼女の批判をしっかりと考慮しなければならぬと思います。

五、中間層の女性について

次に中間層と下層の女性をウルストンクラフトがどのように捉えたかを、『女性虐待』という彼女の小説を資料にしてお話したいと思います。この小説は、彼女が死の床に臥すまで練りに練っていた作品で、最後の部分は「あらずじ」しか残っていません。その意味では未完成のもので、しかし、これは単なるフィクションではありません。

ウルストンクラフト自身が、友人に「この小説は自分の経験に基づいている」と書いてるように、ここに登場するマライアという中間層の女性は、ウルストンクラフト自身と、その妹イライザがモデルであり、もう一人の登場人物であるジマイマという下層の女性も、ウルストンクラフトのメイド、マルグリットの存在が影響しています。

また、この小説の序文には次のような文章があります。「この小説を書く目的は、不公平な法律や社会の片寄った慣習のために、特に女性が耐え忍ばねばならぬ悲惨さと苦しさを描くことである。……女性は、どの階層に属そうとも、等しく抑圧という不幸を負わされていることを示したい。」⁽¹⁹⁾

以上のことから、ここに登場する中間層の女性マライアと下層の女性ジマイマの発言を、「ウルストンクラフトが一八世紀の中間層と下層の女性をどう捉えたか」というテーマと結び付けることは可能だと考えました。

先ず中間層の女性マライアについて述べたいと思いますが、その前にウルストンクラフトの妹イライザのことに少し触れたいと思います。

妹イライザのことは既に少しお話しました。彼女は、結婚し一児に恵まれましたが、その夫は大変残忍で、イライザはついに精神的に破綻をきたします。当時のイギリスでは離婚はまず不可能でありました。ウルストンクラフトは、妹を救う唯一の方法は、夫の所から彼女を逃がしてやることだ、と考えて、この逃亡の手伝いをします。しかし、当時イギリスでは妻というのは法的には夫の所有物でありますから、この逃亡を手伝うということは、すなわち、ウ

ルストンクラフトが、妹の夫の所有物を盗むという罪を犯すことです。また、万が一、逃げ切れなかった場合は、妹には、夫によって監禁される危険性が生じます。(イギリスでは、夫は逃げた妻を監禁することができ、この夫の法的権利は一八四〇年頃でさえ存在したそうです。) 結局妹は、夫につかまることなく一時間三〇分かけて逃げ切りましたが、この時の緊張と恐怖をウルストンクラフトは、「私の心臓は、馬車の音にドキドキし、ドアのノックの音にもぎくくっとしています。彼がどうかわれわれを見つけないように……。」と記し、結婚というものがどんなに女性を抑圧するかをもう一人の妹、エヴィリーナに書いています。

実は、この事件が、この小説の主人公マライアを描く材料になったのです。マライアは、夫ジョージの性格に耐えかねて逃げるのですが、夫につかまってしまい、眠り薬を飲まされて精神病院に監禁されます。ここで、社会の底辺を歩いてきたジマイマという女性の看守と親しくなり、二人は互いに心を開き自分たちの生活史を述べ合います。そしてイギリスの一八世紀の女性は、どの階層に属していても、社会的に、そして法的に不当な扱いを受けており、自己実現が阻まれていと語り合います。

ここでその中間層の女性マライアのことを、時間に制約がありますので、ごく簡単に、彼女の重要な発言を二つばかり織り混ぜて紹介したいと思います。

まず、マライアの生まれた家は、父は暴君、母は無力、兄が長男風を吹かすといった、まさにウルストンクラフトの家庭そのものでありましたが、しかし、経済的には恵まれていました。そこでマライアは、平安を願って結婚します。夫ジョージは、飲酒、女性関係、ギャンブル、暴力に明け暮れる人で、マライアとの結婚も彼女の持参金、相続財産が目当てであったのです。そこでマライアは、次のようにいいます。

「現在のイギリスの不公平な法律のもとでは、妻というものは、丁度、夫の馬やろばと同じように夫の所有物なのです。妻は自分のものと言えるものは何も持っていません。夫は、法律が彼のものと見なす時には、それを妻が使って

いる瞬間にも、あらゆる手段を用いてそれを取り上げることができるとは。……食べさせてやっているのだから、という理由で。……妻が自分で稼いだものであっても、夫は罰せられることなく妻からそれを取り上げ、売春婦に連れてやることもできます。また、母親の義務を果たすどんなにやさしい母であっても、自分の子供の後見人にはなれないのです。父親が、飲んだくれの野獣のような男であってもです。だから女性は祖国をもっていたとしても、その祖国の法律は、女性を抑圧者から守ってはくれないと言えましょう。⁽²²⁾

そしてマライアは、絶望の館、精神病院の中で「生けるしかばね」のようになりながら、残してきた娘に思いを馳せ、「この世全体がまさに牢獄でなかるうか？　そして、女性は奴隷ではなかるうか？」⁽²³⁾と呟くのであります。

そうしているうちに、マライアは、この精神病院の中でダンフォードという男性と知り合い、二人は互いに愛し合うようになります。それを知ったマライアの夫ジョージは、ダンフォードを「誘惑と密通」の罪で告訴します。マライアは、法廷に立ち、ダンフォードを弁護し自分の考えを次のように述べ、裁判官と対決します。

「私は、道徳的に不純になったなどは、いささかも考えずに、自発的にダンフォードに身を捧げました。……私の国が、私の行為を認めてくれることを願います。しかし、法律が存在するとしても、私は法律ではなくて、自分自身の正義感によって善悪を判断します。というのは、法律とは弱者を抑圧するために強者が作ったものなのですから。そして私は、人間同士の絆である道徳的義務をことごとく無視してきたような人とは一緒に住まない、と宣言します。……私は離婚を要求します。私は自由の享受を要求します。……私は正義と人類愛に判断を求めます。」⁽²⁴⁾

これに対し裁判官は、次のように彼女の要求を斥けます。

「われわれは公私の生活において、フランス革命的原理を好まない。もし女性が不貞の口実や弁解に自分の感情を申し立てることが許されるのなら、それは不道徳の水門を開くこととなる。……両親と親類が選んだ男性を愛し、その人に従うのが女性の義務である。」⁽²⁵⁾

この法廷シーンは、この小説のクライマックスであり、色々興味深い発言がかわされますが、マライアについては、時間の関係で、次のことを述べて終わりにしたいと思います。

ウルストンクラフトの描いたマライアの話は、特殊なことではなく、一八世紀のイギリスの中間層の女性には、誰にでも起こりうることなのです。大方の中間層の女性は、保護と安定を求めて、必然のこととして結婚します。しかし、結婚するということは、女性は、法的には、子供と全く同じ立場に立つということを意味します。

すなわち、女性は、結婚と同時に、夫のコントロール下に入り、夫の所有物となり、財産権を失い、また子供の後見人にもなれず、離婚もできない、ということになるのです。そういったことが、どんなに女性を抑圧し、どんなに女性を不幸にしているか、そしてまた、国民の半分である女性のこうした不幸が、社会の進歩をどれだけ妨げているかを、ウルストンクラフトはマライアを通して訴えていると言えましょう。

現実にイギリスで、既婚女性の財産権が認められたのは一八七〇年であり、また離婚は一八五七年に不完全な形で認められ、子供の後見人に関しては、一八三九年に認められていることを考えますと、ウルストンクラフトの主張が如何に先進的なものであったかがよくわかります。また、イギリスでは、当時、既婚女性は法廷で自分の考えを述べることは難しかったので、マライアの法廷におけるスピーチというのは、大変チャレンジングな場面でありますし、また、その内容、すなわち、自由恋愛愛的な考えも、評判の悪かったウルストンクラフト自身の男性関係の正当性を明らかにしているようで大変興味深く感じられます。

六、下層の女性について

次に精神病院の看守で、このマライアの世話をする最下層の女性ジマイマを取り上げたいと思います。

ここで申し上げねばならないことは、ウルストンクラフトが下層の女性に関心を抱き、著作の中に彼女たちへの愛情を現すようになったのは『女性の権利の擁護』の出版後にフランスに渡り、彼女自身がそこで、メイドのマルグリットを雇ってからのことだということです。マルグリットは、ウルストンクラフトの娘の世話をし、またウルストンクラフトの二度にわたる自殺未遂の折には、心の支えになり、彼女の死の日まで尽くしたフランス人の女性ですが、このマルグリットこそが、そしてマルグリットに対するウルストンクラフトの称讃の気持が、彼女に、下層の女性が直面する苦しさを認識させたといわれています。

事実、ウルストンクラフトの初期の著作を見ますと、下層の女性たちは、ずるがしこい存在として描かれ、チャリティの対象としてしか扱われていません。また、『女性の権利の擁護』をみますと、上流階級の女性は約40ヶ所を取り上げられていますが、下層の女性は、たった二ヶ所でしか取り上げられていません。しかし、今述べたメイド、マルグリットと自分の娘を連れて旅した北欧の旅の記録『北欧旅行記』(Letters written during a short Residence... 1796)には、一八世紀の北欧の下層の女性たちの悲惨な姿が同情を持って描かれ、従来の著作とは趣を異にしています。

さて、精神病院の看守であるジマイマの話に戻りますと、ジマイマは、ウルストンクラフトの記述によれば、「野獣のように、あるいは悪疫に感染したもののように穴から穴へ追われてきた」⁽²⁶⁾極貧の女性であります。彼女は、私生児として生まれ、幼少の頃に母親を亡くし、天涯の孤独となります。彼女は自分のことを「砂の上に生み落とされた卵のようだった」と言い、「誰にも暖かく愛されず、生まれた時から軽蔑され、社会の中で自分の足場を持つチャンスも、いや、一人の人間として見なされるチャンスすらもなかった。……どうやったら、惨めな奴隷状態から立ち上がれるかを教えてくれる人もなかった」と訴えます。⁽²⁸⁾

そして一六歳の時の出来事を次のように語ります。

「私の仕事場の主人が、家族が教会に行っている時に、突然私をぶん殴り、彼の野獣のような欲望に服従するよう脅迫し、私を屋根裏に閉じ込めました。その時の私の惨めさ、恐怖といったら、とても表現できません。そして、もっと恐ろしいことに、私は妊娠したのです。そのお腹の子は私と同じ私生児になるのです。主人は、自分の妻の目を恐れ、私に薬をくれました。私は涙がこぼれました。そしてその薬を飲んだ私は、頭がグラグラし、気絶したのです。しかし、若さが私を救ってくれたのです。」⁽²⁹⁾

そして、その後は、生きるためには、あちこちから声をかけてくる男性の欲望に屈し、売春婦になるしかなかったことを語りますが、その売春という仕事も警官が法をたてにして圧制をふるいお金をゆすりになるので恐怖の連続であったと語ります（一八世紀ロンドンの警官は、何か理由をつけては、わいろを要求することで有名だったそうです）。そして、次のように一八世紀のイギリスの社会制度を告発します。

「働く意思があれば仕事は見つかるものだ、と私はよく聞かされました。それは男性に関しては、そういえるのかもしれません。女性に関しては違います。但し、最も卑しい肉体労働、体を売ることには甘んじるならば別ですが。」⁽³⁰⁾ また、やっとの思いで見つけた洗濯女という職の労働条件について、次のように男女格差を述べます。「私は夜中の一時から夜の八時までを（一九時間を）一八ペンスから二〇ペンスで働きました。これは、まさに女性固有の惨めさでした。男性なら私の半分の労働で、また私の半分の能力しか持たなくとも、それ相当の生計がたてられたのに。女性である私は、有徳な生活をする能力があっても、社会の汚物として投げ出されたのです。そして、パンを手にするために機械のように働かねばならなかったのです。私は、本当に憂うつに、自暴自棄になりました。」⁽³¹⁾ M. Dorothy George の書いた『十八世紀ロンドン你的生活』(London Life in the Eighteenth Century, London, 1951) によれば、当時、最も苛酷な仕事をしていた労働者は洗濯女で、普通は雇ってくれる家に夜中の一時に行き、一日半の労働をしたようです。一九世紀になってからは少しこの条件は良くなったそうですが（五〇―五一ページ参照）。

また、重い洗濯物を落として足に怪我をした時に受けた病院の扱いについても憤慨して話をします。それは、病院は、入院させる際に万が一に備えて貧乏人からは埋葬料として一ギニーを徴収すること、また、医者は、金持の患者の役に立てようと貧乏人の患者を実験材料にすること、更にまた、医者は、貧乏人の女性患者には、その病気が重くても、ワインを買ってこい、などと言って小銭を投げつけたりすることなどです。先ほど申し上げた『一八世紀ロンドンの生活』によれば、この病院の実態は正しいようです(二〇七―八ページ)。

そしてジマイマは、病院を退院した時に、つくづく「金持と貧乏人とは、もともと敵対関係にあるのだ」と痛感し、この原理に従って、自分を罵った酔っ払いのポケットからお金を盗み、六ヶ月間刑務所に入れられます。その後、刑務所から文無しで放り出され、再び、飢えと疲労の中を、パンを求めて他人のドアの前に立ち、放浪の生活を送り、紆余曲折を経て、精神病院の看守になった、とマライアに話します。

ウルストンクラフトは、このように極貧女性ジマイマを描くことによって、一八世紀においては、貧しい人間が、女性であった場合には、男性よりも更に悲惨なのだ、と訴えたのです。すなわち、ジマイマのような女性にとっては、結婚というものは、経済的安定を与えてくれるものではなく、また、手にすることのできる仕事の範囲は、男性よりも狭く、賃金は男性より低く、更に強調しなければいけないことは、男性とは違って性的虐待(sexual abuse)を受けるということ。女性には、どの階層に属そうとも、等しく抑圧という不幸を負わされていることを描くのが、この小説の目的」というウルストンクラフト自身の言葉をもう一度かみしめてみますと、結局、ウルストンクラフトは、女性は、どの階層に属していても、男性とかかわる時、すなわち、女性が妻として、情婦として、恋人として、娘として、あるいは売春婦として、労働者として、男性とかかわる時に、男性の作った法律、社会慣習によって抑圧を受けているのだ、ということを主張したかったのだと思います。

では、この小説のマライアとジマイマは何に解決を求めたのでしょうか。この小説が未完成に終わっていることは、

先ほど申し上げましたが、ウルストンクラフトが残したこの作品の最後の部分の「あらすじ」によれば、マライアとジマイマは、精神病院から逃げ出し、マライアの子供（娘）を育てながら、男性の抑圧から可能な限り解放され、女性だけで助け合い、保護し合い、信頼し合って、自由に生きていくということになります。これは、あたかも、現在ラディカル・フェミニストと言われている人たちが目指す女性だけのコミュニティの建設を暗示しているようで興味深いですね。

この小説は、女性が書いた小説の中で、男女の不平等を告発することを目的とした最初のものであろうと言われていますが、出版されてから約一八〇年にわたり、ずっと無視され続けてきました。しかし、現在は、五種類以上の新しいエディションが現れ、また、この小説についての研究論文も幾つか現れて、特異な社会小説として、注目されるようになったことを最後に申し上げたいと思います。

七、おわりに

以上、ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』と『女性虐待』という二つの著作の中で、上、中、下の三つの階層の女性を、どのように捉え、何を問題提起したかを、私の言葉や分析ではなくて、できるだけウルストンクラフトの言葉をそのまま使って発表しました。それは、ウルストンクラフトという一八世紀末のチャレンジングな女性が、三八年という短い生涯の中でどんな女性に出会ったか、その女性たちが持っている問題や苦しみをどのように具体的に表現したか、そして、男性支配社会の構造をどのように変革しようとしたかをお伝えしたことになると思います。

彼女の問題提起に対して彼女が考えた解決策は、現在の目から見れば、道徳的、空想的色彩が強いのですが、これ

は、労働運動や社会主義運動、女性運動の本格的登場が一九世紀になってからであることを考えれば時代の限界と言えましよう。

しかし、ここに紹介した彼女の二つの著作は、当時の社会矛盾を体現する女性たちの姿をリアルに捉えて問題を提起し、一八世紀のイギリスの社会のあり方を知的な女性の目をもって鋭く批判しています。そして二〇世紀の偉大なイギリスの女性作家、ヴァージニア・ウルフが「ウルストンクラフトは、今も生き活躍する。彼女は論じ実験をする。今、われらの世代にまで彼女の声は響き、そしてわれらを動かす。」³³⁾と言っているように、ウルストンクラフトの著作に見る一八世紀の女性の問題は、本質的には二〇世紀の女性の問題として今でも生き続けていることを最後に申し上げて、私の話を終わりにしたいと思います。

〔注〕

- 白 井 堯 子
- (1) 翻訳書としては、白井堯子訳（未来社、一九八〇年）があり、本稿における引用はすべてこの訳書による。
 - (2) Ralph M. Wardle, "Mary Wollstonecraft, Analytical Reviewer," *PMLA*, LX II (Dec. 1947), 1000-9 を参照。
 - (3) *Collected Letters of Mary Wollstonecraft*, ed. Ralph M. Wardle (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1979), p. 166.
 - (4) 翻訳としては、白井厚・堯子訳『メアリ・ウルストンクラフトの思い出』（未来社、一九七〇年）があり、本稿における引用はすべてこの訳書による。
 - (5) 前掲訳、一一三ページ。
 - (6) John Knowles, *The Life and Writings of Henry Fuseli* (London, 1831), I, p. 167.
 - (7) *The Anti-Jacobin Review and Magazine*, I (1798) の索引項目を参照。
 - (8) 注(4)を参照。
- (25)

- (9) 白井訳、『女性の権利の擁護』、一六―七ページ。
- (10) 本稿に簡単にまとめた『女性の権利の擁護』の主張については、白井訳、四五、四九、五六、五七、八〇、二七六―八、二八一、三二四ページを参照。
- (11) *Collected Letters*, pp.120,152,133,145,126,and p.120.
- (12) 白井訳、『女性の権利の擁護』、四五ページ。
- (13) 前掲訳、九三ページ。
- (14) 前掲訳、二五五ページ。
- (15) 本稿にまとめた『女性の権利の擁護』中の上流階級の女性批判については、白井訳、二六、五一、五四、一〇九―一〇、一二五、二六八、二七二ページを参照。
- (16) 白井訳、『女性の権利の擁護』、二七九ページ。
前掲訳、一六六ページ。
- (17) Edmund Burke, *Reflections on the Revolution in France* (Doubleday,1961), p.90.
- (18) *Collected Letters*, p.391.
- (19) Mary Wollstonecraft, *Mary, A Fiction and The Wrongs of Woman* (London:Oxford Univ.Press, 1976), pp.73-4.
- (20) *Collected Letters*, p.84.
- (21) Wollstonecraft, pp.158―9. 一八世紀のイギリスの女性の法的立場については、William Blackstone, *Commentaries on the Law of England*の第一巻一五章三節、第二巻二九章六節を参照。
- (22) Wollstonecraft, p.79.
- (23) Wollstonecraft, p.197.
- (24) Wollstonecraft, p.199.
- (25) Wollstonecraft, p.80.
- (26) Wollstonecraft, p.80.
- (27) Wollstonecraft, p.80.
- (28) Wollstonecraft, p.106.

- ②9 Wollstonecraft, pp.107-9.
③0 Wollstonecraft, p.114.
③1 Wollstonecraft, pp.115-6.
③2 Wollstonecraft, p.118.
③3 Virginia Woolf " Mary Wollstonecraft, " in *The Second Common Reader* (London: The Hogarth Press, 1932), p. 176.